

終戦の頃

宮澤喜一

昭和二十年八月、敗戦の日から二週間ほどたった頃、大平さんと私は麻布狸穴の小高い芝生に座って焼け跡を眺めていた。この間まで続いた空襲は遠い昔のことのように思われ、街を走っていた軍用自動車も姿を消し、あたりは全く静かだった。焼け野が原のむこうに芝浦の海がキラキラ光っており、焼け跡から材木を探して掘立小屋を作ろうとしているらしい人が遠くに見えた。炎天のもとにすべては死んだように動かず、エジプトの墓場のようであった。当時私たちはこれを「虚脱状態」と呼んだ。

敗戦と同時に東久邇宮内閣が組織され、津島寿一さんが大蔵大臣になられると、同郷の後輩大平青年はその秘書官に選ばれた。そして私は大平さんから手伝いをするようにいわれた。二人が座っている芝生は、ほんのわずかの間、大蔵大臣の官邸として借り受けた焼け残った建物の庭になっていた。

景色を眺めていた大平さんがしばらくしていった。「これからどうやって日本人を食わせるか。外地から帰ってくる人も多いだろう。何百万人かが餓死しなければ日本は生きられないかも知れない。すべてがとまってしまった今の日本で、鉄道だけがとにかく今日まで動いている。国鉄を担保にアメリカから金を借りる手はないだろうか」。その時、私は昔ハリマンが満鉄を買おうとしたことをボンヤリ想い出しただけで、黙っていた。けれども後々までこの時の大平さんの言葉を忘れることはなかった。空腹をかかえながら、これからの日本人の進路を考えていた大平青年は、それから三十五年後に日本の運命を双肩に担う人になった。

大平さんがどんなきつかけで政治に出る決心をしたのか、ついに聞く機会がなかった。

昭和二十四年、時の池田蔵相が大平さんを秘書官にと懇望したが、大平さんは行方不明であった。やっと九州の出張先にいるのをつきとめ事情を告げて帰京を促すと、折返し電報がきた。「心千々ニミダレ決心ツカズシバラクゴ猶予ヲ乞フ」。時間を稼げば難を逃れられるという大平流計算であったが、池田さんはかまわず発令してしまった。そしていやいや帰ってきた大平さんに、とにかく座ってだけいてくれ、それがいやなら夜だけでもいい、といった。

週末には池田さんのお伴でよく箱根に行つて、麻雀のお相手を仰せつかった。大平さんは大きなアガリしかねらず、興奮すると晩年の演説を思わせるような大きなジェスチャーでパイを引いた。そうかと思うと、長尾峠の月を眺めながら芝生の上でロングフェローの詩を大声で聞かせたりした。

学生の時、神楽坂で太鼓をたたいて伝道した話をその頃一度だけ聞いたことがある。しかし、その後は晩年まで自分の宗教のことは口にしなかった。ご家族に対しても、熱心なクリスチャンだった長男の正樹君が亡くなった時、「俺もあいうように葬ってくれ」といったことがただ一度だけあったそうである。

大平秘書官の時代は、いわゆるドッジ・ラインで予算がズタズタに切られ、初当選の池田大蔵大臣に対する代議士さん達からの風当たりが強く、秘書官などは虫ケラのように扱われた。あれだけ政治嫌いで「心千々に乱れた」大平さんが、それから一年半後に選挙に立つようになったのはそのような環境に触発されたからではなかったか。大平さんの晩年はまことに輝かしいものであった。しかし栄光のライトに照らされながら、心は別の人生を夢みているような、そんな瞬間が時々あった。

(衆議院議員・内閣官房長官)